その他

スポーツ科学部３ポリシーに基づく学生自己評価アンケート報告 2017 年度版

A report on students' self evaluation of achieving three policies at Nihon Fukushi University, Faculty of Sport Sciences, 2017

甲斐　久実代　　安藤　佳代子　　藤田　紀昭

Kumiyo KAI,　Kayoko ANDO,　Motoaki FUJITA

日本福祉大学　スポーツ科学部

Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

１．はじめに

日本福祉大学（以降，本学とする）は，「学校教育法に則り，人間および社会に関する諸科学を総合的に教授研究し，高潔なる人格と豊かなる思想感情を培い，社会にとって有為な専門家であり，かつ地域社会に貢献できる人材を養成することを目的とし，広く人類社会の発展に寄与することを使命」としている（本学学則第１条）また，教育標語として「万人の福祉のために，真実と慈愛と献身を」を掲げ，真理の探究と人間の尊厳を基に，21 世紀の新しい社会福祉の構築に貢献する指導的人材を養成することを教育目標としている．本学では「スポーツ」領域を本学の教育・研究の主軸の一つとして位置づけ，「ふくし」社会[1]実現の理念のもとに８番目の学部として 2017 年４月にスポーツ科学部（以降，本学部とする）を開設した．したがって，本学部は「スポーツの力を人々の幸せに生かし，社会の発展に寄与すること」を目的として開設された学部である．

本学が目指している「ふくし」社会とは具体的には地域の活性化や共生社会，生涯にわたる健康で心豊かな生活，持続可能な社会保障制度の実現という言葉に換言できる．スポーツはその実現に貢献するものとして期待されている．なぜなら，スポーツは，自発的な運動の楽しみを基調とする文化的特性を持つ（日本体育協会 2011）からこそ多くの人々が継続的に親しみ，社会発展に寄与することが可能だと考えられるからである．そのためにも，運動の上手い下手や障害の有無，性別や年齢に関係なく，指導できるスポーツ指導者の養成や社会的環境の形成が求められている．これにより，障害者を含むすべての国民が，生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営むことが可能となる．こうした社会的要請に応えることが本学部のミッションである．

そこで，本学部では，すべての人々（国民）が生涯にわたって，健康であることを土台とした文化的な生活，活力ある生活，等しく生きがいを持った生活を営む共生社会を構築するために，文化としてのスポーツを多角的視点（人文・社会・自然科学等）から理解し，学校，地域，その他の場で，真摯に人と向き合い，よりよい関係を作り，スポーツの指導力，企画力，組織力，問題解決能力を持って実践にあたることのできる人材を養成することを目的の一つとしている．つまり，本学部に所属する全ての学生が，競技スポーツや地域スポーツなどの多様な領域において，スポーツの意味や価値，社会的環境などを把握・理解し，創意工夫に基づく適切なプログ

ラムを作成できる力を身につける．また，子どもから高齢者，障害者を含む，全ての人々に対応できる人材となること（設置の趣旨）を目指しているのである．

以上のような大学としての使命，本学部としての使命を果たすべく本学部のディプロマ・ポリシーを以下の3分野9項目とした（図1参照）．なお，3つ目の項目〈思考・判断・表現（日本福祉大学スタンダード）〉は本学が学部学生のみならず教職員も身につけるべく定めている4つの力（日本福祉大学スタンダード），見据える力，共感する力，関わる力，伝える力＝理解する力を本学部のディプロマ・ポリシーに取り入れたものである．

【ディプロマ・ポリシー】

〈知識〉

① スポーツ文化を多角的視点（人文･社会･自然科学的視点）から理解している．

国民が心身ともに健康で文化的な生活を送るためには，スポーツ文化を学際的・実践的視点から考え，多角的視点から理解している必要がある．

② スポーツの楽しさを体験的に理解している．

自発的な運動の楽しみを特性とする文化であるスポーツ文化を普及，振興していくためには，競技力の獲得等によって得られる精神的充足感のみならず，本質的なスポーツの楽しさを体験的に理解している必要がある．

③ スポーツや運動の意味や価値について理解している．

すべての国民にとって，健康の維持増進のみならずスポーツや運動がもたらす多様な意味や価値について理解している必要がある．

〈技能〉

④ 人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけている．

スポーツや運動の指導にあたっては，幼児から高齢者まで，また障害者を含んだすべての人間を対象にその発達や身体状況に応じた指導方法が身についていなくてはならない．また，それらの学びは，学生自身の競技力の向上を目指す上でも大変重要となる．そして，障害のある子どもや障害のある人への系統的な運動・スポーツ指導が障害のない一般の人のスポーツ指導に通じることを体験的に学んでいる必要がある．

⑤ スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている．

学んだスポーツ科学の知見に基づき，先人から受け継いだスポーツ文化を創造し，さらに次代に引き継ぐという継承・発展の責務が私たちにはあり，そのことを自覚してスポーツ実践やスポーツ指導に取り組むことができる必要がある．

⑥ 地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけている．

様々なスポーツや運動の実践の場面で生じている諸課題を的確に発見し，諸資源を利用して解決に導く実践力，人々のニーズに応じた事業を企画・立案し組織的に運営・展開していく力，集団や団体を組織し経営する力は，競技力の向上を含む自身のスポーツ実践を支え，そして人々に適切にスポーツを提供し普及していくために必要である．

〈思考・判断・表現（日本福祉大学スタンダード）〉

⑦ 真実を見極める「知」への探求心を有している．

「知」への探究心によって，スポーツ文化に関連する諸科学の知識をより広く身につけておくことで，スポーツ文化をより深く理解することにつなげる．

⑧ 国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけている．

基礎学力としての語学力や情報収集・伝達のための情報機器の有効活用力を生かし，人々がつながり合うために発揮されるコミュニケーション力は，グローバル社会に対応する人材には不可欠である．

⑨ 他者と，スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている．

弱者や困っている人に共感し，そうした人々に友愛の念をもって関係性を構築し，スポーツを通じた共生社会の形成，さらに「ふくし」の発展に資することは本学の建学の精神に通じると考えている．

これらを習得させるための前提として設定しているのが以下に示すアドミッション・ポリシーである．

【アドミッション・ポリシー】
① 入学後の修学に必要な基礎学力を有している人
② スポーツへの関心があり，学んだ知識と身につけた力を社会で活かしたいと考えている人
③ 自己の可能性に挑戦する意欲のある人
④ 自分の考えを表現し，意思の疎通を図ることができる人
⑤ 他者を理解し，仲間や集団づくりに取り組むことができる人

さて，2012 年 8 月に文部科学省中央教育審議会から答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～」が出された．ここでは学士課程教育の質的転換の方策として体系的，組織的な教育の実施が必要とされている．具体的には大学，学部，学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し，どのような知識，技術，技能を習得させようとしているか（ディプロマ・ポリシー）の明確化やそのための個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかということや教育課程の構造をわかりやすく明示すること（カリキュラム・ポリシーの明確化）などが求められている．これらにアドミッション・ポリシーを加えた 3 ポリシーを明確にし，教員間の連携と協力のもと組織的教育が行われることが求められている．そして，学位授与方針に基づく組織的な教育のためのファカルティ・ディベロップメント（FD）を実施することで PDCA サイクルを確立して，大学教育の改革サイクルを展開させることが必要とされている．本報告はまさに FD のための基礎資料を提供することを目的としたものである．PDCA サイクルの中では C（チェック）にあたるものである．

本学部の事業評価（成果評価）となる指標としては学募状況，学生就職状況，学生の満足度，学生による授業評価，学生の授業出席率，学生の成績評価，科学研究費をはじめとした学外資金の獲得状況，研究業績の質的評価と量的評価，各種外部評価など多様なものが考えられる．これらは本学部の教育が成果を上げているかどうかを測る重要な指標であるが，いわば二次的な評価といえる．学部のミッションが明確であり，そのためのディプロマ・ポリシーが明確であるならば，私たちが価値あるものとして学生に身につけてほしいと願っている内容を習得しているかどうかを知ることが重要であり，この評価が 1 次的な評価といえる．

このような学習内容を学生が身につけていないとすれば，その原因を学生にさらに詳しく尋ねたり，教員間で自己評価をするなどして，その原因を特定し改善していかなくてはならない．もし，学生たちがこれらの内容を身につけているにもかかわらず，2 次的評価が伴っていないとすれば，広報活動や研究内容，就職の支援方法などに原因があるかもしれないし，もしかするとディプロマ・ポリシーそのものに問題があることを示唆しているのかもしれない．いずれにしろ学部が意図した教育内容を学生が習得しているかどうかを明らかにすることは学部の事業評価の根幹をなすものと言える．学部の使命を果たすために，私たちの顧客といえる学生たちが対して，彼ら，彼女らにとって価値あるものと私たちが考えているもの（ディプロマ）を習得しているかどうかが学部としての成果の指標であり，それをもとに改善計画を立てること（ピーター，1995）がファカルティ・ディヴェロプメントと言える．

このような認識のもと，本学部では，学部 1 期生 196 名に対して入学直後にアドミッション・ポリシー，およびディプロマ・ポリシーおよびスポーツ界において大きな課題とされている体罰に関するアンケート調査を実施した．今回はその調査結果の報告である．今後の学部事業評価（成果評価）を実施するための事前調査という位置づけである．この調査は今後，各学年終了時に実施し，学部事業評価を行う予定である．また，2 期生以降も同様の調査を実施する予定であり，年次報告をしていく予定である．

2．方法

アンケートの質問項目は，本学部のアドミッショ

日本福祉大学　スポーツ科学部ポリシー

【養成人材像】すべての人々（国民）が生涯にわたって、健康であることを土台とした文化的な生活、活力ある生活、等しく生きがいを持った生活を営む共生社会を構築するために、文化としてのスポーツを多角的視点（人文・社会・自然科学等）から理解し、学校、地域、その他の場で、真摯に人と向き合い、よりよい関係を作り、スポーツの指導力、企画力、組織力、問題解決能力を持って実践にあたることのできる人材を養成する。本学部に所属する全ての学生が、障害者スポーツから導かれるスポーツの意味や価値、指導方法を理解し、またその取り組みに学び、子どもから高齢者まで、すべての国民の生活を豊かにするためにスポーツの力を生かすことのできる人材となることを目指す。

アドミッションポリシー		カリキュラムポリシー	関連科目	ディプロマポリシー	
A	入学後の就学に必要な基礎学力を有している人	①大学生としての一般教養はもとより、日本福祉大学に入学した学生として共通に学ぶ「ふくし」に関する科目を『総合基礎科目』とし、スポーツ科学を構成する専門諸科学の知識や研究成果を学ぶ科目及びスポーツの実践力・指導力を養う演習・実習系科目を『専門科目』、幅広い知見の獲得や特定の資格を取得するための科目を『自由科目』として教育課程を編成する。	スポーツ科学入門、スポーツ生理学、機能解剖学、認知心理学、トレーニング科学、スポーツ心理学、スポーツマネジメント、スポーツ医学、スポーツ法学、スポーツ政策・行政論　など スポーツ実技、専門実技、スポーツ指導法演習、障害者スポーツ指導法演習A/B、スポーツ支援者論　など	知識	①スポーツ文化を多角的視点（人文・社会・自然科学）から理解している ②スポーツの楽しさを体験的に理解している
B	スポーツへの関心があり、学んだ知識と身につけた力を社会で生かしたいと考えている人	②スポーツの文化的内容を学ぶために、「する、みる（調べる）、支える、つくる、伝える」という観点を軸として主な科目を分類し、それぞれに必修科目を配置することでスポーツの幅広い学びを担保する。	スポーツ社会学、ふくしスポーツ論、スポーツ哲学、スポーツ史、スポーツ文化論、障害者スポーツ論、スポーツ人類学など	知識	③スポーツや運動の意味や価値について理解している
C	自己の可能性に挑戦する意欲のある人	③教育課程を編成する上で、以下の科目群に分類し、必要となる科目を配置する。 ④コース制を取らず、履修モデルを示すことにより、学生への履修指導を行う。各履修モデルに共通する学びの内容として、「幼小の子どもたちから、成人、高齢者、までのライフステージ及び障害者における、生涯スポーツの実践を展開できること」、「スポーツニーズに応じたプログラムを策定し指導することができること」、「スポーツ集団を組織し運営できること」を位置付ける。上記の共通内容を基本とし、以下のとおり履修モデルを想定する。 ・ふくしスポーツ系履修モデル、 ・スポーツ教育系履修モデル、 ・トレーニング科学系履修モデル	発育発達論、スポーツ栄養学、スポーツバイオメカニクス、特別支援教育論、測定・評価、スポーツコミュニケーションなど スポーツフィールドワーク、スポーツフィールドワークⅡ、スポーツ文化論、スポーツ指導法演習　など 地域スポーツ論、　衛生・公衆衛生学、コンディショニング演習スポーツキャリア教育、スポーツ・運動指導者論　など	技能	④人間の発達に基づいた系統的な指導方法を身につけている ⑤スポーツ文化の継承・発展に貢献できる力を身につけている ⑥地域をはじめとした様々なスポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力を身につけている
D	自分の考えを表現し、意思の疎通を図ることができる人	⑤小集団によるゼミ教育は、１年次「導入ゼミ」、２年次の「スポーツフィールドワークⅠ」、３年次「専門演習Ⅰ」、４年次「専門演習Ⅱ」により一貫性を担保し、４年間のゼミ活動を系統的・発展的に展開する。	導入ゼミ、経営学、統計学、社会学、哲学、スポーツ科学演習、経済学、生命と環境、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅱ　など	思考・判断・表現	⑦真実を見極める「知」への探求心を有している
E	他者を理解し、仲間や集団作りに取り組むことができる人	⑥スポーツ指導の実践力を身につけるために、学校、各種福祉施設、地域（総合型地域スポーツクラブ等）等、スポーツの多様な実践場面に出向き、実際のスポーツ指導現場を体験する「スポーツフィールドワークⅠ」を２年次に、同じく「スポーツフィールドワークⅡ-１」「スポーツフィールドワークⅡ-２」を４年次に配置し、スポーツ実践の現場における課題や問題意識、学生自身のスポーツ指導への関わり方について学習する。	フレッシュマン・イングリッシュⅠ、情報処理演習Ⅰ、フレッシュマン・イングリッシュⅡ、情報処理演習Ⅱ、スポーツ統計学、スポーツメディア論　など スポーツジェンダー論、野外スポーツ論、ふくしスポーツ演習、肢体不自由児指導法、地域スポーツ論　など	思考・判断・表現	⑧国際社会を含む諸領域での情報の伝達・判断・理解力を身につけている ⑨他者と、スポーツを含む多様な手段によって良好な関係を構築する力を身につけている

日本福祉大学スタンダード

図１　日本福祉大学スポーツ科学部の３ポリシー

（日本福祉大学スポーツ科学部開設申請資料〈2015〉より藤田作成）

ン・ポリシーに応じた５項目（A1-A5），ディプロマ・ポリシーに応じた９項目（D1-D9），社会性，体罰に関する２項目（社会，体罰）を加えた16項目とした（図２）．それぞれ「強くそう思う」「思う」「あまり思わない」「全くそうは思わない」の４件法で回答させた．

2017年４月に日本福祉大学スポーツ科学部に入学した１年次生に対して，アンケートを実施した．新入生総数196名のうちアンケートを回答したものが190名，回収率は96.9%だった．

３．結果

欠損，複数回答を除いた回答数を各項目の回答数として括弧内に記載し，各回答の割合を図２に示した．回答の選択肢のうち，「強くそう思う」「思う」を肯定的な回答，「あまり思わない」「思わない」を否定的な回答（否定）としてその割合を示した．

アドミッション・ポリシーに関しては，すべての項目において肯定的な回答が否定的な回答を上回る結果となった．A1（大学で学ぶための基礎的な学力をつけてきたと思う）に関しては，「強くそう思う」33.7%，「思う」45.3%，「あまり思わない」18.9%，「全くそう思わない」2.1%であった．A2（スポーツに関心があり，スポーツに関する知識を身につけ将来に生かしたいと思う）に関しては，「強くそう思う」71.6%，「思う」28.4%，「あまり思わない」0.0%，「全くそう思わない」0.0%であった．A3（スポーツや勉強で自分の可能性に挑戦し，自身を向上させたいと思う）に関しては，「強くそう思う」56.3%，「思う」43.7%，「あまり思わない」0.0%，「全くそう思わない」0.0%であった．A4（自分の言葉で意見や思いを表現し，相手に伝えることができる）に関しては，「強くそう思う」16.3%，「思う」51.6%，「あまり思わない」30.0%，

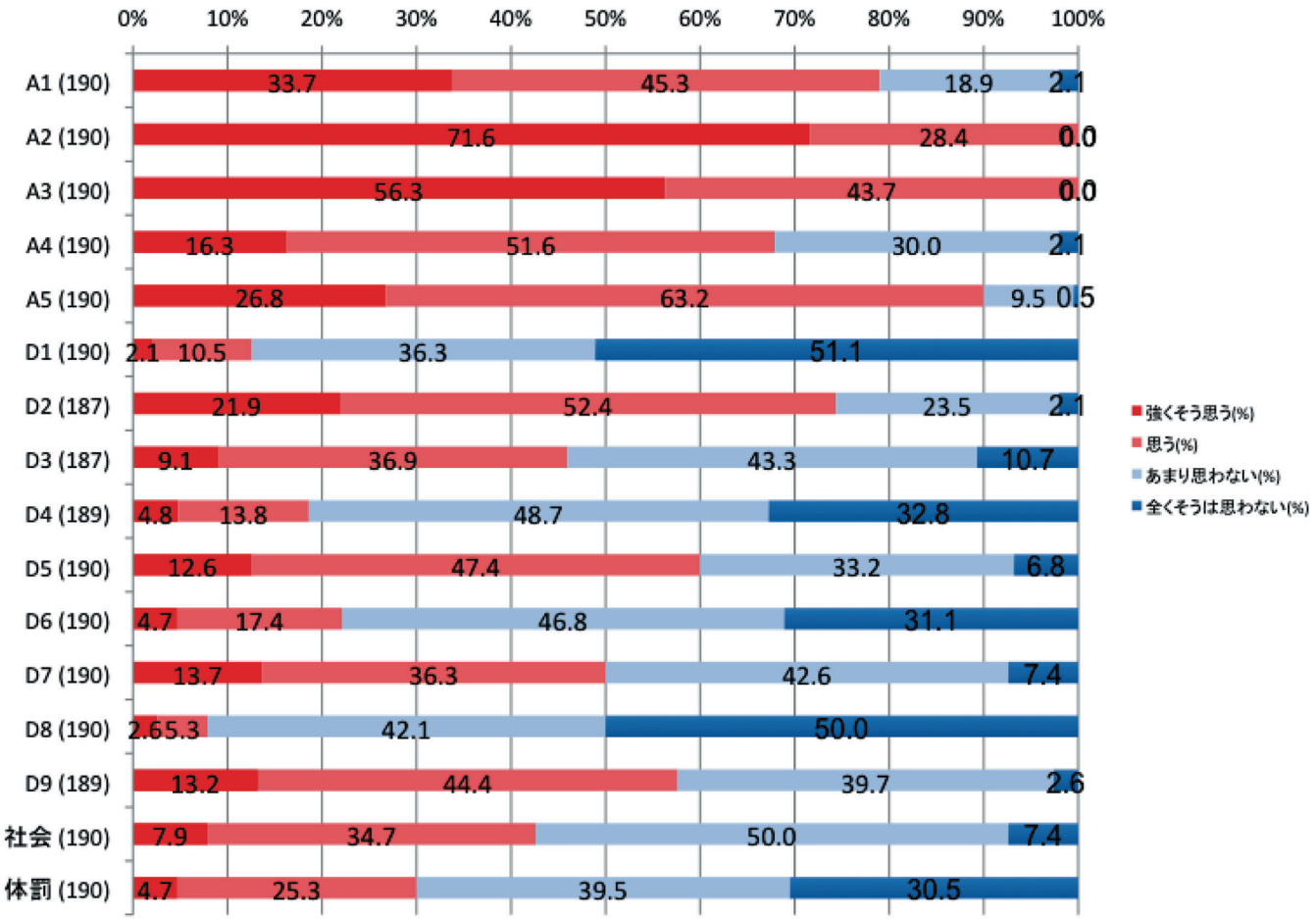

図２　アンケート結果

「全くそう思わない」2.1%であった．A5（仲間のことを理解したり，力を合わせて物事に取り組むことができる）に関しては，「強くそう思う」26.8%，「思う」63.2%，「あまり思わない」9.5%，「全くそう思わない」0.5%であった．

ディプロマ・ポリシーに関しては，D2，D5，D9を除いて，否定的な回答が肯定的な回答を上回る結果となった．D1（スポーツを人文科学［倫理的視点や歴史的視点］，社会科学［社会学的視点やマネジメントの視点］，自然科学［生理学的視点，バイオメカニクス的視点など］多様な観点から説明することができる）に関しては，「強くそう思う」2.1%，「思う」10.5%，「あまり思わない」36.3%，「全くそう思わない」51.1%であった．D2（実際にスポーツを行い，その楽しさや難しさを理解し説明することができる）に関しては，「強くそう思う」21.9%，「思う」52.4%，「あまり思わない」23.5%，「全くそう思わない」2.1%であった．D3（スポーツがもたらす社会的な意味や価値，スポーツの力について理解し，説明することができる）に関しては，「強くそう思う」9.1%，「思う」36.9%，「あまり思わない」43.3%，「全くそう思わない」10.7%であった．D4（幼児や大人，高齢者や障害のある人に人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができる）に関しては，「強くそう思う」4.8%，「思う」13.8%，「あまり思わない」48.7%，「全くそう思わない」32.8%であった．D5（人々のスポーツに対するニーズを理解したうえで，スポーツのやり方や楽しさ，スポーツの持つ様々な力や影響力を伝えることができる）に関しては，「強くそう思う」12.6%，「思う」47.4%，「あまり思わない」33.3%，「全くそう思わない」6.8%であった．D6（スポーツ大会や教室などの企画や運営をすることができる）に関しては，「強くそう思う」4.7%，「思う」17.4

%，「あまり思わない」46.8%，「全くそう思わない」32.8%であった．D7（様々な社会事象や問題，疑問に思ったことに対して，それを深く知ろうとする気持ちがある）に関しては，「強くそう思う」4.7%，「思う」17.4%，「あまり思わない」46.8%，「全くそう思わない」31.1%であった．D8（英語を使って自己紹介や会話をしたり，スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができる）に関しては，「強くそう思う」2.6%，「思う」5.3%，「あまり思わない」42.1%，「全くそう思わない」50.0%であった．D9（様々な場面で困っている人を見たとき話を聞いたり，支援したりすることができる）に関しては，「強くそう思う」13.2%，「思う」44.4%，「あまり思わない」39.7%，「全くそう思わない」2.6%であった．社会（様々な場面で人と関わり，その集団がうまく機能するよう働きかけたり，調整することができる）に関しては，「強くそう思う」7.9%，「思う」34.7%，「あまり思わない」50.0%，「全くそう思わない」7.4%であった．体罰（スポーツ場面における体罰はある程度仕方ないと思う）に関しては，「強くそう思う」4.7%，「思う」25.3%，「あまり思わない」39.5%，「全くそう思わない」30.5%であった．

4．考察

肯定的な回答が多かった項目として，A2（スポーツに関心があり，スポーツに関する知識を身につけ将来に生かしたいと思う），A3（スポーツや勉強で自分の可能性に挑戦し，自身を向上させたいと思う）は全回答者が肯定的な回答をした．また，D2(実際にスポーツを行い，その楽しさや難しさを理解し説明することができる)は，74.3%が肯定的な回答をした．このことから，スポーツへの関心は非常に高く，またスポーツの楽しさを体験的に理解している学生が多いと考えられる．また，A5（仲間のことを理解したり，力を合わせて物事に取り組むことができる）は90%が肯定的な回答を，D9（様々な場面で困っている人を見たとき話を聞いたり，支援したりすることができる）も60%近くが肯定的な回答を示し，他者を理解し，支援することに関して積極的な姿勢である者が多いと言える．

一方で，D1（スポーツを人文科学［倫理的視点や歴史的視点］，社会科学［社会学的視点やマネジメントの視点］，自然科学［生理学的視点，バイオメカニクス的視点など］多様な観点から説明することができる）に対して肯定的な回答は12.6%，D8(英語を使って自己紹介や会話をしたり，スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができる)に対して肯定的な回答は7.9%にとどまり，スポーツを多角的視点で説明したり，英語を用いて調べる能力を身につけていく必要があると言える．また，D4（幼児や大人，高齢者や障害のある人に人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができる）に対しても肯定的な回答は18.5%にとどまり，今後，スポーツや運動の実践の場面に対応できる実践力の強化が必要である．

5．まとめ

本学部のアドミッション・ポリシーとディプロマ・ポリシーの項目に関して，スポーツ科学部学生の状況把握ができた．肯定的な項目については，さらに向上できるような意識をもって今後実施していくが，否定的な回答が多い内容に関しては2年生以降の授業にて対応できるよう教員も意識して授業をしていくことが重要であると考えられる．今後も，学生の理解度に合わせた授業展開，また方向性をもった内容を十分に検討することが課題となる．次年度以降も多くの科目で実践も含めた内容が実施されることから，学生の学びにつながるよう教員一同で努力していきたいと考えている．

注

1　漢字の「福祉」では高齢者や障害者など社会的な弱者のみ対象とする，狭い意味で「福祉」を理解しがちである．本学ではひらがなの「ふくし」を使い「すべての人」を対象に，「ふつう」の「くらし」の「しあわせ」あるいは「ふだん」の「くらし」の「しあわせ」を実現していくことを社会的使命とし，本学では「ふくし」を用いている．なお，本学が標榜する「ふくしの総合大学」は登録商標となっている．

参考文献

1）ピーター・F・ドラッカー編著，田中弥生訳（1995）非営利組織の「自己評価手法」ダイヤモンド社．

2）（公財）日本体育協会（2011）スポーツ宣言日本　―21世紀におけるスポーツの使命―，（公財）日本体育協会ホームページ http://www.japan-sports.or.jp/about/tabid/994/Default.aspx,　2017 年 8 月 17 日閲覧．

参考資料：アンケート用紙

スポーツ科学部アンケート

・このアンケートは本学部での皆さんの学びの過程を知り、今後の授業の在り方等を検討するために行うものです。
・本調査は、入学時、および各学年終了時に実施するもので、今回が最初の調査となります。
・結果は今後の学部のカリキュラムの在り方に生かされるとともに、学術的な場で公表する予定です。
・ただし、調査の結果は統計的に処理され、名前等が公表されることはありません。また、結果が授業の成績等に影響することもありません。
・調査への参加は任意で、参加しないことによって不利益を受けることもありませんが、ぜひご協力ください。
・調査の趣旨等を理解し、同意した人は以下の設問に答えてください。4つの選択肢のうちのどれか一つに○をつけて答えてください。

日本福祉大学スポーツ科学部アンケート　　2017 年　4月　　6日実施　　学年　1年　　学籍番号　　氏名

No	質問内容	1	2	3	4
1	あなたは大学で学ぶための基礎的な学力を身につけてきたと思いますか？A1	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強くそう思う
2	あなたはスポーツに関心があり、スポーツに関する知識を身につけ将来に生かしたいと思いますか？A2	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強くそう思う
3	あなたはスポーツや勉強で自分の可能性に挑戦し、自分を向上させたいと思いますか？A3	全くそうは思わない	あまり思わない	思う	強くそう思う
4	あなたは自分の言葉で意見や思いを表現し、相手に伝えることができますか？A4	全くできない	少しできる	できる	十分できる
5	あなたは仲間のことを理解したり、力を合わせて物事に取り組むことができますか？A5	全くできない	少しできる	できる	十分できる
6	あなたはスポーツを人文科学（倫理的視点や歴史的視点）、社会科学（社会学的視点やマネジメントの視点）、自然科学（生理学的視点、バイオメカニクス的視点など）多様な観点から説明することができますか？D1	全くできない	少しできる	できる	十分できる
7	あなたは実際にスポーツを行い、その楽しさや難しさを理解し説明することができますか？D2	全くできない	少しできる	できる	十分できる
8	あなたはスポーツがもたらす社会的な意味や価値、スポーツの力について理解し、説明することができますか？D3	全くできない	少しできる	できる	十分できる
9	あなたは幼児や大人、高齢者や障害のある人に人間の発達理論に基づいたスポーツ指導を行うことができますか？D4	全くできない	少しできる	できる	十分できる
10	あなたは人々のスポーツに対するニーズを理解したうえで、スポーツのやり方や楽しさ、スポーツの持つ様々な力や影響力を伝えることができますか？D5	全くできない	少しできる	できる	十分できる
11	あなたはスポーツ大会や教室などの企画や運営をすることができますか？D6	全くできない	少しできる	できる	十分できる
12	あなたは様々な社会事象や問題、疑問に思ったことに対して、それを深く知ろうとする気持ちがありますか？D7	全くない	少しある	ある	十分ある
13	あなたは英語を使って自己紹介や会話をしたり、スポーツに関する英語の論文を読んだりすることができますか？D8	全くできない	少しできる	できる	十分できる
14	あなたは様々な場面で困っている人を見たとき話を聞いたり、支援したりすることができますか？D9	全くできない	少しできる	できる	十分できる
15	あなたは様々な場面で人と関わり、その集団がうまく機能するよう働きかけたり、調整することができますか？（社会人に求められる力）	全くできない	少しできる	できる	十分できる
16	あなたはスポーツ場面における体罰はある程度は仕方ないと思いますか？（体罰）	全くそうは思わない	思わない	思う	強くそう思う

スポーツ科学部に期待することを自由に書いてください。